厚真町災害ボランティアセンター

「自分事にする」視点の大切さを学びました

当時 厚真町災害ボランティアセンター 副センター長
（現 厚真町社会福祉協議会 高齢者生活福祉センター長・生活支援担当主幹）
山野下 誠さん

――ご経歴を教えてください。

厚真町で生まれ、本州の大学へ進学しました。平成8年、厚真町社会福祉協議会に入職したのを機に帰郷。以後、ボランティアや地域福祉関係の業務を担当し、地震があった時は、事務局次長として被災された方の生活支援に当たりました。

山野下 誠さん

――地震発生時の状況を教えてください。

本郷地区の自宅で寝ていました。地震で目が覚め、すぐに東日本大震災を思い起こしました。とにかく激しい揺れで、私が住んでいるのは築40年の家でしたので、倒壊するのではないかという恐怖が頭をよぎりました。

――発災直後、何をされましたか？

揺れが収まり、家族の無事を確認してから外に出ると、すでに近所の人たちが声をかけ合っていました。私はすぐに社会福祉協議会が管理するグループホームなどの高齢者施設に向かい、入所者さんの状況を確認したあと、事務所の様子も見に行きました。事務所内は書棚が倒れ、書類が散乱するなど、ひどい状態でした。

陽が昇ってからは、とにかく情報を得るために奔走しました。停電でテレビは見られず、情報源はカーラジオのみで、何が起こっているのか詳細がわからない。厚真町が一番大きな揺れを観測していたということを知ったのも、あとになってからでした。

厚真町役場から入ってくる情報も限られていましたから、車で地域を走り、各地の避難所などに直接足を運びながら少しでも状況を把握しようとしました。時間が経つにつれ、誰々が亡くなった、行方不明だということが口伝えで伝わってきましたが、現実のこととして受け止めることが難しい気持ちでした。

――災害ボランティアセンターの開設はどのように進めましたか？

当初は各所で緊急対応と混乱が続いており、町とも充分な打ち合わせをすることが難しい状態の中で災害ボランティアセンターを立ち上げの準備を進めることになりました。ニーズ把握はこれからという段階でしたので、準備をしても万が一不要だった場合には関係各所に謝って回ることも覚悟しました。

とにかく「立ち上げ」を決めないことには何も進められないことから、社会福祉協議会として災害ボランティアセンターの開設を判断し、各地から支援に駆けつけていた関係者の力を借りながら準備を始めました。

マッチングを待つボランティア〔厚真町社会福祉協議会提供〕

――山野下さんは副センター長として、ボランティアとの調整に奔走されましたね。

9月7日に立ち上げを決めたあと、私自身はボランティアの問い合わせや関係者との打ち合わせなどで身動きが取れなくなりました。社会福祉協議会のスタッフが手分けをして地域や避難所を回り、被災状況や安否の確認をしながらニーズ把握をしていたのですが、精神的にも肉体的に限界に近い状態でした。

9月11日から、本郷地区の旧かしわ保育園を拠点に本格的な業務を開始しました。フェイスブックで発信したあと、電話は鳴りっぱなしで、膨大な量のメールが届きました。

災害ボランティアセンターには給水や食料運搬など様々なニーズが寄せられましたが、中でも多かったのは家屋内の片付けでした。倒れた家具を移動し、壊れた家財を指定された集積場まで災害ごみとして運びました。

土砂が流れ込んで大きな被害を受けた家屋や瓦礫の中から貴重品を取り出すような活動は、一般のボランティアでは対応が困難で、重機を扱う技術と専門的な知見を持つボランティアの方々の力も借りました。

災害ボランティアセンター本部で業務を行う山野下さん

――ボランティアとのマッチングはどのようにに行ったのでしょうか？

家財の運び出しは10名、資材の運搬は3名というように、それぞれの活動に必要な人数を割り振るのですが、センターに詰め

ダンボール家具のワークショップ〔厚真町社会福祉協議会提供〕

かけたボランティアの皆さんに並んでいただいて「この仕事やってくださる方はいますか?」と聞き、手を挙げてくださった人を順に割り振っていくというやり方でした。寄せられるニーズ数とボランティアの人数のバランスを調整することが難しく、順番が後ろの方には次の依頼が来るまで待機してもらうこともありました。

数日が経つうちに、資格や技術を持っているボランティアさんを把握しながら内容に合わせてマッチングできるようになり、流れもスムーズになりました。

――ボランティアセンターの運用で、特にご苦労された点や印象深い出来事はありますか?

災害ボランティアセンターに寄せられる相談の中には、専門性が必要なものや生業に関わることなど、災害ボランティアセンターが直接対応することが難しい内容もありました。例えば、被災された農家の農作業は災害ボランティアセンターの役割を超えていると考え、対応に悩みました。被災されて大変に困られていたことは間違いなく、もっと何かできたのではないか、と今も考えます。また、作業に必要な人数とボランティアの人数の調整にも苦労しました。

地震による家の片付けは人数が多ければ多いほど、早く終わるというわけではありません。家の中の家財には住人の財産が混じっていて、何もかも捨ててしまうわけにはいきません。必要か不必要かを丁寧にお聞きする必要がありますが、特にご高齢の方に沢山のボランティアさんが矢継ぎ早に「これはどうですか?」と尋ねても混乱するだけです。とにかく、被災された方のペースに合わせた関わり方をボランティアの皆さんにはお願いしていました。

応急仮設住宅への引っ越し作業

発災以降、様々な経験や知識を持つ団体の協力をいただきましたが、一人ひとりの個人ボランティアの力も頼もしいと感じました。

特に印象深かったのは、震災のすぐあとの冬に行われた町主催の「グランドバザール」での活動です。救援物資を被災者の方々に提供する会場で、ボランティアの方々が炊き出しやヨーヨーすくいなど、子ども向けの縁日の企画をしてくださったんです。見ず知らずだったボランティア同士が厚真町のためにと協力し、企画してくれた取り組みがとても印象に残っています。

震災から2年経過した現在も、災害ボランティアセンターの活動は続いています。応急期は過ぎ、現在は生活のための支援窓口の役割を果たしています。必要としている方が一人でもいれば、寄り添い続けていくことが大切だと思っています。

ボランティアによる子ども縁日〔厚真町社会福祉協議会提供〕

――今回の震災をきっかけに「支え合いセンター」も新たに設けられました。

厚真町社会福祉協議会では、災害ボランティアセンターのほか、応急仮設住宅の建設に合わせて道内初となる生活支援相談員（LSA）を配置し、被災された方々の相談支援にも携わることになりました。そして生活復旧の支援へと移る中、地域コミュニティの再構築を目的として、令和2（2020）年4月に支え合いセンターを新設。震災によって地域コミュニティにも大きな被害を受けましたが、地域、ボランティア、社会福祉協議会の各部署が連携して地域の再生、復興に取り組もうとしています。

平成31（2019）年1月から、地域包括支援センターの運営を町から委託されたことで、機能的にも拡充し、職員体制も大きくなりました。大切なのは、それぞれが抱えている課題を共有することです。窓口での相談や訪問活動、サロンなどを通じて得た課題、災害により改めて問題が浮き掘りになったのと同時に、取り組んでいく体制が出来たのは、災害支援での経験が大きいと思います。

――最後に、読者にメッセージをお願いします。

今回、ボランティアの皆さんの力に大いに助けていただきました。遠く離れた地であろうと、被災された方を見過ごさない「自分事にする」視点の大切さを学びました。大切なのは費用対効果や災害の規模だけじゃない、一人ひとりに寄り添うことなのだ、と。

災害が再び起きた時のために、つねに勉強を続けていきたいと思います。厚真町のためだけでなく、次にまたどこかで起きるかもしれない災害に知識や経験を活かしていくことが大切だと思っています。

災害ボランティアセンターに寄せられた応援メッセージ